

新幹線開業と鹿児島市の観光

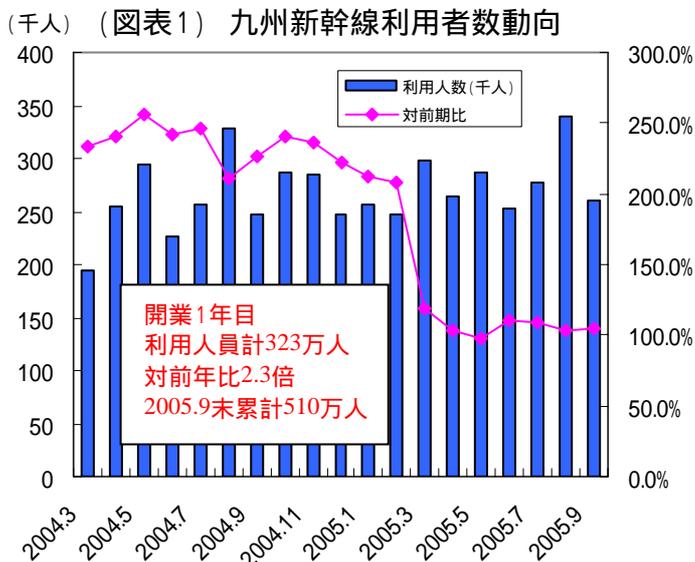
～地域づくりと一体となった観光を目指して～

2005年12月

はじめに

九州新幹線の鹿児島中央～新八代間が2004年3月に開通して1年半以上が経過した。

2005年9月には乗降客数が累計で500万人を突破し、2年目に入ってもおおそ初年度並の乗降客数を確保している(2005年9月末現在)など、ここまでの利用客数の動向は順調と評価されている(図表1)。



注1: JR九州のデータによる
 注2: 2004.3は3/13～3/31の期間のデータ(前期も同様)
 出所: 鹿児島県交通政策課資料

この九州新幹線の開業効果については、鹿児島県内の各機関が様々な分析を行っているが、本稿では公表データをもとに、新幹線部分開業後の観光の動向について、少し考えてみたい。

新幹線開業後の観光客数の推移

2005年9月に鹿児島市が発表した、2004年の観光客数(宿泊者数+日帰客数)は869万人(前年比6.2%増)で、「翔ぶが如く」ブームの影響を受けた1991年の838万人を超え、過去最高を記録した。

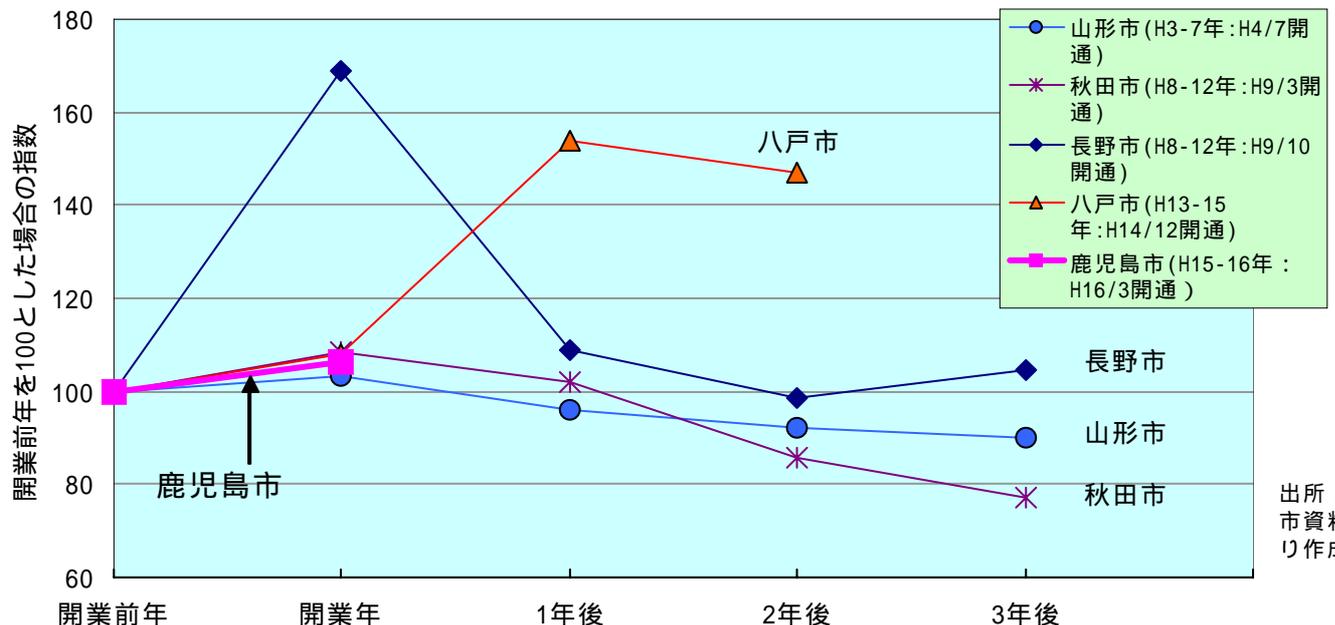
鹿児島県が発表する県全体のデータは、長期に比較可能なデータが県外宿泊観光客数のみであるが、2004年は779万人(前年比2.2%増)で、相次いで襲来した台風の影響などもあって、「翔ぶが如く」ブームの1990年の932万人には及ばないものの、そのうち鹿児島・桜島地区に関しては277万人(前年比9.6%増)、1997年以降では最も高い水準となった。

個別の観光施設をみても、たとえば、維新ふるさと館やかごしま水族館、シティビューの利用者数が、2004年は前年比10%超の伸びをみせた。

さて、このような2004年の鹿児島市の観光客数増加は、新幹線開業の効果によるものである。

近年、山形新幹線(1992年)、秋田新幹線(1997年)、長野新幹線(1997年)の開通や、東北新幹線の八戸延伸(2002年)が相次いだ、そこでも同様に観光客数の増加がみられた。それでは、鹿児島市

(図表2) 新幹線開業前後の観光客数(宿泊・日帰合計)推移



出所: 各市資料より作成

の動向はそれらと比較してどのように評価できるの
 であろうか。

図表2は、各新幹線の終着駅がある市（山形市、
 秋田市、長野市、八戸市、鹿児島市）の、開業前年
 の観光客数（宿泊者数＋日帰客数）を100とした場
 合の、開業前年・開業年・開業1年後～3年後にお
 ける推移をグラフにしたものである。

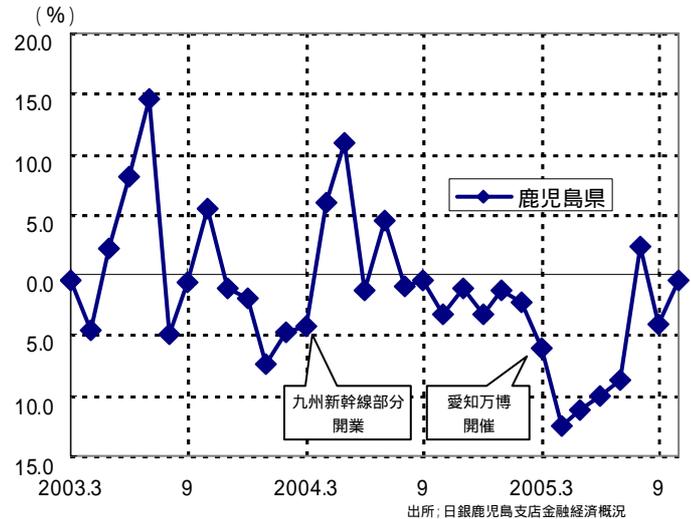
比較可能なデータが開業年までしかない鹿児島市
 を除き、各市とも開業前年から開業年に向けて観光
 客数が伸び、八戸市以外はその後減少に転じ、開業
 2年後には開業前年の水準を割ると同じ経路を
 歩んでいる。新幹線の開業年は新幹線自体の話題性
 もあり観光客が増加するものの、その後は新たな観
 光客の掘り起こしやリピーターの確保に苦戦してい
 る様子がうかがえる。

長野市は、開業年の伸びが3～8%の伸びの他都
 市と比べ、前年比68.8%の大幅増加を示し、開業後
 1年目も他都市より高い水準を維持していたが、こ
 れは開業年である1997年の善光寺のご開帳や翌年
 の冬季オリンピック開催といった特殊要因が寄与し
 ており、それを割り引いて考えれば山形市や秋田市
 と同様の推移と考えて差し支えないであろう。

これと比べ八戸市は、開業年は前年比8.2%増と
 秋田市と同程度の伸びであるが、開業1年後に前期
 比42.0%の大幅な増加を示している。この開業1年
 後の大幅増加には、八戸延伸が12月だったため、
 開業年には約1ヶ月分の集客効果しか反映していな
 いという、計数整理上の特殊要因が背後にあるので、
 実態としては開業後すぐに観光客数が大幅に増加し
 たと判断して差し支えないであろう。八戸市は、県
 庁所在地でなく、また東北新幹線延伸までは観光地
 としての知名度も必ずしも高くはなかったことから、
 交流人口規模が山形市などと比べても小さかった。
 そのため、新幹線の延伸で八戸市が観光地として
 「再認識」され、急激な伸びが生じたといえる。し
 かし、そのような好機に臨んで、八戸市では食を中
 心とした観光（屋台村や観光市場、朝市）の展開や、
 津軽地方や十和田と連携した広域観光の推進など、
 各主体の積極的な取り組みが奏功した点も注目でき
 るであろう。そのため、開業2年後は観光客数が前
 年比4.5%の減少となったが、それでも開業前の水
 準を大きく上回っている。

鹿児島市の観光客数の推移は、前述のとおり開業年
 の2004年に前年比6.2%の増加を示した。これを図
 表2にプロットすると、他の都市とほぼ同じ経路を
 辿っているといえる。鹿児島市にとっては過去最高
 の観光客数を確保したとはいえ、その開業効果は過
 去の先行事例から予想される範囲内と考えるべきで
 であろう。したがって、新たな観光客の掘り起こしや
 リピーターの確保がなされないと、その開業効果は
 すぐに剥落するものと予想される。

(図表3) 鹿児島県ホテル旅館宿泊客数推移(対前年同期比)



2005年の観光客数の推移

鹿児島市の2005年の観光客数の動向はまだま
 とまったデータがそろっていないが、図表3の鹿児島
 県全体の月次の宿泊客数動向をみると、2005年は同
 年3月から開催された愛知万博との競合もあり、前
 半は2004年よりも低い水準で推移しているⁱ。

また、2005年の1月から10月の間の維新ふるさ
 と館、鹿児島水族館、シティビューの利用客数は前
 年同期比がそれぞれ12.3%減、0.7%減、1.0%増で
 あり、特に観光客向けの性格の強い維新ふるさと館
 が昨年同期の水準を下回っているⁱⁱ。これらの数字
 などから、開業1年後の鹿児島市の観光客数は弱含
 みに推移するものと予想される。

鹿児島市の観光の動向

もちろん鹿児島市の観光にかかわる主体がこのよ
 うな状況に手をこまねいてみているわけではない。
 2005年の鹿児島県経済のトピックスを考えてみても、
 その中にたとえば、

- 4月 焼酎テーマパーク開業（薩摩金山蔵）
九州観光推進機構発足
ドルフィンポート開業
- 9月 鹿児島県 観光プロデューサー起用
- 10月 尚古集成館リニューアル
- 11月 さつまいもフェスティバル実施
- 12月 かごしま検定開始

など、観光に関連する、比較的前向きな話題が多い
 ことに気づく。また、鹿児島市は今年度内に「鹿児
 島市観光未来戦略」（目標年度：2011年度）を策定
 する予定である。このように鹿児島市は官民とも、
 2010年度に迫った九州新幹線の全線開通を前に、鹿
 児島市を観光面でも魅力的な地域にする取り組みに
 向けて動き出したような印象を受ける。これらの取
 り組みが今後も一層積極的に行われることに期待し
 たい。

鹿児島市観光のひとつの方向性

日本政策投資銀行南九州支店ではこれまで、南九州地域が有する地域資源を活かすことで、この地域が「信頼性」の高い地域であることを国内外に発信し、他地域との交流を活発化させて、ものづくり・観光・まちづくりといった地域振興を進めていくべきことを提言してきた。ここでいう「信頼性」とは、たとえばトレーサビリティを通じた安心・安全な食品の提供であったり、自然やまちの景観の保全であったり、地域の防犯の充実であったり、またコミュニティの重視であったりと多岐にわたるものであろうが、いずれにせよ、地域住民の生活に安心感、充足感をもたらすような方向性でものづくり・観光・まちづくりを進めることが、ひいては他地域に対し南九州地域の独自性をアピールすることにつながるのではないかと考えるのであるⁱⁱⁱ。特に最近の観光は、いかにも観光地然とした施設よりも、それぞれの地域の住民が生活を享受している場面そのものに関心を持っているように感じる。その意味で、南九州地域という「信頼性」の高い地域での生活そのものをアピールすることが、観光の振興にもつながる可能性が高いと考えられる。

本年度当支店が発表してきた「ミニレポート」^{iv}でも、この視点を重視してきた。観光との関連でいえば、「『奄美ミュージアム構想』の挑戦」（2005年6月）では、地域資源の再発見から、それらを使って観光や地域産業を振興するまでの方策のひとつとして「エコミュージアム」の手法を取り上げた。

「景観と地域づくり」（2005年5月）と「今ある街を活かした都市再生」（2005年10月）では、直接観光には言及していないものの、前者は身近な地域資源（たとえば溶結凝灰岩でできた建造物など）を活かした景観形成を通じて、また後者では倉庫などの既存の建造物の「コンバージョン（改装・改造による用途転換）」を通じたゆるやかな都市再生により、「信頼性」を高める方向で都市の魅力づくりを行うことが、観光にかかわる魅力の創出に大きくかかわってくると考えられる。

また、「鹿児島県本格焼酎の現在」（2005年9月）と「LOHASを考える」（2005年11月）においては、食品産業を中心に、消費者の安心・安全志向や本物志向に対応する過程で、消費者の「信頼性」を得るための企業行動が必要であることを指摘したが、これは観光にかかわる産業にも広く当てはまるのではないだろうか。

いずれにせよ、新幹線の開業効果を一過性のものにしないため、さらには2010年度の新幹線全線開通後に備えるためには、官民が連携して観光プロパターの施策を推進するのと同様、地域づくりと一体となった観光振興を積極的に行っていく必要がある。

おわりに

以上、新幹線部分開業後の鹿児島市の観光について考察したが、南九州商工会議所交流会議地域振興研究会が新幹線部分開業後の2004年5～6月に実施した調査で「観光満足度」と「行ってみたい県」の両部門において鹿児島県が九州各県のうち第1位となった^vことからもわかるとおり、鹿児島県は観光に関して大変強力なポテンシャルを持っているといえるだろう。この実力と外部からの評価を維持・発展させるべく、地域づくりと一体となった施策の積み重ねがなされることに大いに期待したい。

ⁱ 2005年8月の宿泊者数の増加は大型コンベンションの開催によるものである。

ⁱⁱ 新幹線開業2年目の4月から10月の間を比較すると利用客数の前年同期比は、維新ふるさと館15.6%減、かごしま水族館1.5%減、シティビュー2.3%減である。

ⁱⁱⁱ 日本政策投資銀行南九州支店（2005）「信頼性のブランド化 日本政策投資銀行南九州支店地域づくり中期ビジョン」および日本政策投資銀行南九州支店（2005）「ミニレポート 地域診断・鹿児島市；新幹線一周年・これからどうする」を参照。

^{iv} 各ミニレポートについては、日本政策投資銀行南九州支店のホームページを参照されたい。

http://www.dbj.go.jp/s_kyusyu/localdata/index.html

^v 2005年6月14日南日本新聞記事を参照。

〒892-0842 鹿児島県鹿児島市東千石町1-38
日本政策投資銀行南九州支店（支店長：澁澤 洋）
お問い合わせ先：企画調査課 中村聡志
Tel：099-226-8203 E-mail sanakam@dbj.go.jp